

第 15 回 東南アジア分科会議事録

日時:2010年6月7日(月) 15:00 - 17:00

場所:東京文化財研究所 4階 文化遺産国際協力センター国際研修室

出席者:上野邦一、坪井善明、新田栄治、宮崎恒二(以上、東南アジア分科会委員)、佐藤桂(報告者)、田中健太郎(文化庁)、杉山洋、佐藤由以(以上、奈良文化財研究所)、清水真一、友田正彦(以上、東京文化財研究所)、原本知実、原田怜、田代亜紀子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. 文化遺産国際協力コンソーシアム 第3期委員について

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

・第3期東南アジア分科会委員紹介

2. 日メコン交流 古都シンポジウムについて

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

報告:平成21年度に外務省から東南アジア分科会に報告があったとおり、平成22年6月22日に外務省主催日メコン古都シンポジウム「未来へつなごう!いにしへのきずな」が、奈良で開催される予定である。これに伴い、日本国際協力センターの「21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)」によってメコン5カ国から50名が来日する。文化遺産国際協力コンソーシアムでは、日本国際協力センターの協力依頼を受け、6月17日に来日する50名に対し、文化遺産と観光をテーマとしたプログラムを1日行う予定である。具体的には、「日本ナショナル・トラスト」と「たいとう歴史都市研究会」の協力のもと、日本の文化遺産保護と観光、町並み保存などについての講義と現場視察を行う。

3. 文化遺産情報資源共有化ワーキンググループ活動報告

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

報告:平成21年度4月から活動している文化遺産情報資源共有化ワーキンググループについて報告する。平成21年度は6月に準備会合を開いた後、まずは検討のための具体的案件を、同志社大学文化遺産情報科学研究センターとの共同研究の枠組みで立ち上げることとなった。この具体的案件については、日本による文化遺産国際協力が多く行われているアンコール遺跡群を最初の案件として取りあげることとなった。結果、アンコール遺跡群に対する調査研究を実施している4機関(早稲田大学、上智大学、奈良文化財研究所、東京文化財研究所)による情報共有モデル構築が開始され、現地における情報共有状況を把握するためのカンボジアにおける現地調査、フランス極東学院によるアンコール王朝期の遺跡に関するデータベースであるCISARKとの協力体制が整えられた。本年度は、関連諸機関とメタデータ検討、仮フォーマット作成作業などをおこない、冬には研究会を開催し、成果としてのモデルケース発表と提言をまとめ予定である。

4. タンロン皇城遺跡保存に関する協力について

友田正彦(東京文化財研究所)

報告:タンロン皇城遺跡保存に関する協力については、本年度から日越協働による日本ユネスコ信託基金事業が開始され、日本側実施分についてはユネスコハノイ事務所と東京文化財研究所との間で4月1日からパートナーシップ契約に基づく事業が開始した。これは2012年末までの事業となる予定である。全体の事業費は約100万ドル、このうち約半分が日本側の作業分担当ということになる。作業計画を4月にユネスコ側に提出しており、これに基づいて第1回のミッションが派遣された。従来の日越合同専門家委員会という枠組みのもとで作った、歴史班・考古班・建築班・保存科学班・社会学班・保存計画班という班分けを維持しており、今回のミッションは青木先生をリーダーとする保存科学班がメインとなった。今回は東京文化財研究所、奈良文化財研究所のメンバーのほかにも2人の民間の方にもお願いし、環境観測装置の設置等に関するテクニカルな部分を担当いただいた。具体的には、発掘現場に一昨年から設置している気象観測ステーションの移設、遺構保存研究の基礎データ収集のための土壌水分計設置、出土木材の一時保管方法についての検討、土や木材の分析に関するベトナム側機関との協議、さらにはこれらの項目に関する現場スタッフへの講習などを行った。

タンロン遺跡は、最上級の国家史跡に格上げになっており、これはベトナムに10件しかないうちの1件ということになる。今回保存科学関係の作業を主に行ったのは、ホアンジウ通り18番地遺跡と呼ばれる考古学発掘調査が行われている地域である。気象観測ステーションはこの発掘区域内にあるが、本年10月のハノイ千年祭に向けて暫定整備を行う上で従来の場所では不都合があるということで、移設された。ここでは温度・湿度・雨量・日照・風向・風速といったデータを計測している。移設にあわせて、既設機材のメンテナンス、劣化したセンサーの交換等を行うとともに新しい装置を1つ加えた。これは、携帯電話からインターネットにデータを飛ばして、日本からでも1日1回更新されたデータをチェックすることができるというものである。これにより、データの異常はすぐ確認できる状況となった。

水分センサーは、D4と呼ばれる発掘区に設置しており、気象観測ステーション移設先の南方となる。そこに深さ1mのピットを設け、20cmおきの深度で水分計を設置した。この計測値もデータロガーに記録されるが、こちらは現地保存データを月に2回パソコンを持ってきて吸い上げる。この水分移動計測は、今後遺構の保存、特にベトナム側から希望がでてくる露出展示を行うためにはどのような水分状況を保てば良いのかを考える基礎データとなる。

発掘では、多くの木材、木製品が出土しており、現状では現場に設けた桶のようなものに水を張って浸けてある。将来的にはきちんとした保存処理が行われるべきであるが、当面の一時保管方法としてこのようにされている。しかし、水が干上がってしまったり、藻が繁殖するなどの問題がおきている。奈良文化財研究所は木材保存に多くの実績を持つが、日本とベトナムの木材では材質が異なるので、ベトナムの森林系大学と共同研究ができないか、協力をお願い

しているところである。一方、地質や地下水に関する調査については、以前に考古学研究所からの依頼により現場のボーリング調査を行った地質研究所との間で、今後の協力に関する協議を行っている。

今回の派遣とは直接関係ないが、中軸区では千年祭に向けた準備が進んでいる。仏植民地時代の軍司令部建物を展示施設として活用するための大改修が行われており、建物本体の工事はすでに完成している。周囲の景観も変わり、端門から南中軸線の延長上にある旗台まで見通せるようになった。また、軍がトレーニングセンターとして使っていた敷地も、既にハノイ市に返還されて整備が進んでいる。また、遺跡に隣接する地域にも変化があった。現在国会議事堂の建設工事が行われている向かい側に外務省の建物があり、これは元仏領インドシナ財務省の庁舎であった。しかし、この場所に新議事堂の駐車場を整備する計画が出ており、歴史的建物が取り壊される可能性もあると聞いている。つまり、タンロン遺跡が保存される一方で、こういった植民地時代の遺産が壊されていくかもしれない状況にある。

ベトナム側との協議も行ったが、ユネスコ信託基金に関しては、日本側が提出した作業計画に対するベトナム側の意見とベトナム作業計画を待っているところである。日本側作業計画についてはほぼ合意を得られているが、具体的作業については実施機関と話を詰める必要があり、ベトナム側の役割分担が確定することが先決である。

昨年来、ハノイの千年祭に向けてベトナム側から協力要請があり、その中に発掘された遺跡の復元画像を作りたいという内容があった。坪井先生にご尽力いただき、進出日本企業等から協力を得てどうにか対応できる見込みとなったが、復元図についてはまだ未定の部分が多い。

(補足)ベトナム社会科学院総裁で党中央委員のドー・ホアイ・ナム氏が来日する。ナム氏には早稲田大学のアジアセミナーで講演いただく予定である。ホアンジウ 18 番地遺跡発掘を担当する考古学研究所は社会科学院の下にあるので、ナム氏にもタンロンについて話を聞く予定である。ブイ・ミンチー氏は CG に関して日本から協力できないと言われたので、ベルギーと協力して行うことになったといっている。10 月の千年祭については情報が錯綜している。式典が、10 月 1 日から 10 日までどのような日程となっているのか、9 月にはシンポジウムもあるということなので、情報を集めなければと思っている。ベトナム側は7月の世界遺産委員会が終了し、8 月くらいからいろいろ動き出すのではと思っている。ハノイ建都千年の説明パンフレットを日本語とベトナム語でつくる作業が大使館で行われていると聞いた。ベトナムは千年祭で今年非常に盛り上がり、たまたまベトナムが ASEAN の議長国であることもあって、日本との政治トップの交流も盛んである。

・よくわからないが、ベトナム側は現在の露出している遺構を少し整理してみせるつもりなのか、上のほうに映像を映写して何らか映像をみせようということなのか。

→ 基本的には、暫定的に埋め戻したうえで、柱位置などを平面的に表示する方向のようである。さきほど、CGへの協力を日本が断ったという話がでていたが、協力を断ったのではなく、資金援

助だけなら可能性は低いですが、グラフィック作成自体には協力の用意があるのでデータを提供してほしい、といった。

・ベトナム側の窓口はコアセンターのソン所長か。考古学研究所との連携はどうか。

→ ソン所長が窓口になっている。また、協議ではコアセンターの副所長が、この事業の窓口は自分たちだと再三言っている。しかし、実際は遺跡の内容に関して十分理解しておらず、考古学研究所側との連携も悪く、会って同じ場で話をさせるとお互いに都合のいいように解釈していて、話が噛み合わないというのが現状である。

・建物の復元については、必要ないと考えている。根拠資料が足りず不可能ではないか。にもかかわらず、ベトナム側がやりたいと言っているが、変なものが出てくるのではないかと恐れている。説得力のあるものがないが、ないにもかかわらずやった、タンロンがこうだったと誤解されてしまうのが一番恐れていることである。そのあたりは、解決策があるはずなので、緊密に連絡を取り合っ

て良い方向にもっていきたい。

・考古学研究所が12月までに書き終えると言っていた発掘報告はまだでていないようである。

・世界遺産申請に関するイコモスの評価は出たのか。

→ そろそろ出ても良い頃だが、まだ出ていない。

5. カンボジア コーケー遺跡における調査について

佐藤桂(早稲田大学)

報告:カンボジアのコー・ケー遺跡につき、2005年より行ってきた調査の概要を報告する。本調査を始めた背景には、早稲田大学建築史研究室で80年代からスリランカ、タイ、ミャンマーなどで実施してきた建築調査がある。1993年にはアンコール遺跡救済チームが結成され、現在も活動を継続している。それと並行して、アンコール以外での調査研究にも重点を置いており、1998年からはサンボー・プレイ・クックにて修復事業を行っている。2007年より科研費調査として「クメール帝国地方拠点の都市遺跡と寺院遺構に関する研究」(研究代表者:溝口明則 名城大学)を実施しており、その一環として、コー・ケーにおいて広域的な実測調査を行っている。本研究の主目的は、遺構の実測調査を通して、クメールにおける都市の基本的構造について考察することである。アンコールの重層する都市形態とは異なり、コー・ケーでは単一の都市としての構造的特質が比較的良好に残存していると考えられる。調査では、建築・土木遺構を可能な限り正確に実測・記録し、その特徴と分布状況、また地形・水系との関係に注目している。

アンコールからは一般に「王道」と称される古代の道路が四方に延びており、コー・ケーはその北東へ向かう古道の近傍に、アンコールから約 90km 離れて位置する。都市中央にはラハールと称されるバライ(灌漑用池)が存在し、その北方に国家寺院プラサート・トムが位置している。19 世紀末より 1930 年代までのフランスによる一連の先行調査によって、同遺跡群全体には 40 程の遺構の存在が確認されていた。空中写真には多数の線状の土手の存在が確認されるが、従来の研究では、これらは都城壁の一部ではないかと推測されていた。本調査では、こうした既往の仮説についても、一つ一つ検証を試みている。

2005 年に実施した予備調査では、主にパルマンティエの文献資料(1939 年)をもとに、遺構の現状の確認を行った。このとき平面図と写真による簡単なインベントリーを作成した。同地はいまだ地雷撤去が完了していないため、面的な調査は困難であるが、地雷撤去が進むにつれ未確認の遺構も多数発見された。本調査では、地雷撤去の情報を得ながら、徐々に踏査範囲を拡大していった。

2007 年からは、特に GPS とトータルステーションを用いた実測により、調査の精度を上げることを目指した。まずはアンコールの JICA 基準点から、コー・ケー遺跡群内に基準点を移設し、これをもとに、残存する寺院遺構や土手・池などの土木遺構に関しても、可能な限り正確な位置記録を行った。現在、主要な 34 の寺院遺構に関して、材料の区別や残存状況を含めた詳細な平面図を作成している。寺院遺構のみならず、ラテライト造の基壇遺構や池・土手などの土木遺構、標石、マウンド等を含め、127 の遺構を記録し、インベントリーを作成している。

これらの遺構の分布状況を標高のデータに重ねてみると、地形と立地条件との密接な関係がうかがわれる。都市全体を俯瞰すると、最も標高の高い 2 つの地点(標高 110m 程)にいずれも寺院が存在しており、この近傍を水源として、セン川の 2 本の支流が北へ向かって流れているのが分かる。東側の分水嶺となる尾根線上には、一連の寺院群が並んでおり、ここより水は西に向かって流下し、ラハールに集水されていたようである。ラハールの土堤の地形測量により、この人造湖の形状が明らかとなり、特にその軸線の傾きと周辺遺構の軸線の傾きとの関係について分析を進めている。注目されるのは、標石と見なされる石柱が都市全体に分布しており、これらが都市計画の基点を担った可能性が推測されたことである。また、ラハールの南北軸を南へ延伸すると、プラサート・クナと称される遺構の上に至るが、従来、未完成の祠堂、あるいは木造祠堂の基壇などと推測されてきたこの遺跡が、周囲に散在する石材の計測に基づく復原研究から、高さ 7m 程もある巨大なリング・ヨニの台座であったことが判明した。その配置から推察するならば、リングに注がれた聖水は、北へ流下し、象徴的にはラハールに注ぎ込まれるものであったと考えることができる。つまり、水の流れが都市の基軸を担っていた。

GPS データに基づき、遺構相互の位置関係を見ていくと、興味深い事実が多数確認される。特にプラサート・トムを中心として、周囲の遺構が同一の軸線内で計画されていたことが明らかとなってきている。現在は、都市全体に地割計画のようなものが存在したかどうか、分析を進めているが、結果がまとまった時点で報告したい。

現在までに明らかになっているのは、地形と水の流れが、都市構造の重要な基盤を構成していたことである。治水の観点から考察すると、アンコールにおいて、クーレン山からトンレサップ湖に向かって流れる河川を利用して、集水し、保水し、再分配していた構図が、同様に、コー・ケーにも認められることが分かる。コー・ケーのラハール南方には、砂岩岩盤に神々や水の生き物を彫り付けた一連の彫刻群が認められるが、これとクーレン山中のクヴァル・スピアンとの類似性も指摘され、聖水を浄化するような役割を担っていたことも推察される。

・土塁のような都城を囲むものは何だったのか。

→ まだわからないが、少なくとも都城壁ではない。おそらく幾度か拡張しており、道路として、またダムとして機能したことが考えられる。これらの土塁の特徴として、いずれも片側にだけラテライトが積んであることが挙げられる。その理由はわからないが、河川の流れを誘導しようとした痕跡が認められる。

・大きいリングがあったと思うが。

→ プラサート・トムの正面に並ぶ大きなリングを安置する砂岩造祠堂は、南北に 3 つ並んでいるが、殆ど見分けがつかないほど類似しているものの、規模は南に行くにしたがって少しずつ大きくなる傾向が認められる。

・アンコールでは東西南北軸線が一致した形で寺院や都市があったと思うが、これより前の時代はずれているということだろうか。

→ アンコール以外の都市(サンボー・プレイ・クック、コンボン・スヴァイのプレア・カーンなど)では、基本的に正方位からずれている。アンコールでは、うまく土地の傾斜と南北軸とが一致していたために、遺構も正方位にしたがっていたと考えることもできる。コー・ケーにおける軸線のずれに関しては、もう一つの可能性が挙げられる。それは、当時の磁北とコー・ケーの基本的な角度が一致するという点で、磁石を使ったことが証明できれば、軸線のずれは簡単に説明できる。しかしいずれにせよ、さらなる調査が必要である。

・この成果はまとめて刊行するのか。

→ 科研費調査は本年度が 4 年目の最終年度なので、来年には最終報告書をまとめる予定である。

6. その他

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

平成 22 年度 ACCU 集団研修について:文化庁、ACCU 奈良、イクロム、東京文化財研究所、奈良文化財研究所が共催する集団研修の今年のテーマは遺跡の調査と保存である。この研修については各国ユネスコ国内委員会の推薦者が受け入れられているが、2008 年度からは、より多くの参加者を受け入れるために、コンソーシアム会員による推薦枠というものができている。ACCU が対象としているアジア太平洋地域に限るが、研修参加候補者に心当たりがあったら、ぜひご推薦いただきたい。

昭和女子大学友田博通先生からのホイアンツアーについてのご案内:8月にホイアンをめぐるツアーを企画している。ぜひ広くご周知いただきたい。

以上